
キツネツキ！

石神穂波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キツネツキ！

【Zコード】

N7840D

【作者名】

石神穂波

【あらすじ】

”狐”の名を持つ一人の女の子が繰り広げる、エッチな和風伝奇ファンタジーです。どんな事件が起きるのか？それは読んでのお楽しみ

第一話 智狐と獣子（前書き）

こんにちは、石神穂波と申します。

小説を書くのは初めてなので読み難い点など多いと思いますが、暖かく見守って下さいね！

この作品は春エロス2008参加作品です

第一話 智狐と狐子

その時、秋葉智狐あきはほとむは欲求不満に陥っていた。

「ん～！エッチしたいなあ！」

サンドイッチを握り締めたまますくと立ち上がり青い空に叫ぶ智狐。

サラッとした長い髪が靡き、形の良い胸がふるん、と振るえ、廻りの男から小さな歓声が上がった。

ガタン！

智狐の目の前でお弁当を掻き込んでいた

悪友の清水狐子しみずきこがずつこける。

「あんたねえ、デッカい声でなんて事叫んでんのよー。」

春の日差しが眩しいキャンパス。

二人は少し遅めの昼食タイムを楽しんでいる。

「だつてえ、最近イイ男が居ないんだもん。

ねえキコリン、抜かずの十発位軽々とこなすイイ男紹介してよ

ブバッ！ゲホゲホゲホ！きやああああ！

隣のテーブルの男がコーヒーを噴出して咽せ始め、

その前に居た彼女らしい娘がコーヒーまみれになつて悲鳴を上げた。

狐子がバン！と音を立ててテーブルを叩きつつ智狐を睨みつけて怒鳴る。

「あ・の・ね！…いい加減にしどきなさいよここの淫乱！

一体何股掛けるつもりなのよーあと、キコリンって言つたなー！」

「またやつてるよ、あのーー人」

「どうせ秋葉が暴走してゐるのを清水が抑えてるんだろ。いつもの事だ」

「それにしても秋葉つて、ウチの大学の色男何人喰つたんだ？」

「噂じや三十人とも、百人とも言われてるが」

「マジ?俺も喰つてもらおうかな?」

「バーカ、お前じやルックス審査で撥ねられるつて」

「やあねー、秋葉さんつて、イツドコヤリマンつて言われてるのよね」

「何それ?」

「イツでもドコでもエッチしちゃう、つて事よ」

廻りのテーブルから聞こえてくる、

潜めようともしない影口にヒクつきながらジロッと廻りを睨みつける fox。

その迫力に押されて、周囲の人間が一瞬でシーンと静まり返つてしまつ。

「やーね、キコリン。そんな怖い顔してると彼氏なんて出・来・な・い・ぞ」

「おんぞれはああああ!」

foxは、完璧に人事の様にウインクしながら微笑む智狐の頭をぱしーんと叩いた。

「あー、疲れ果てたよあたしゃ」

講義が始まり、机に突つ伏しつつ唸る fox に、同じ高校から進学して来た有香が同情する。

「大変ねえ、智狐ちゃんと付き合つのも。

ねえ、何で fox は智狐ちゃんと仲が良いの?」

「んー、何でだろ……?」

fox と智狐が出会つたのは一年前、大学の入学式。

背が高く、パツと見は美形の男性にも見える fox に智狐が突然声を

掛けてきた。

「あの、入学式終わつたら私とエッチしませんか？」

大きな瞳をキラキラと輝かせながらウキウキと声を掛けってきた智狐の、

外見の凄まじい可愛らしさとその発言のギャップに平衡感覚を失つた fox は

思わず講堂の床にへたり込んでしまつた。

「やだ！ 医務室行きましょ！」

智狐は華奢な体からは想像も出来ない怪力で fox を引き摺り、医務室のベッドに引っ張り込んで余りの事にパニクつている fox のスキを突き

あつと言つ間に服を脱がせた。だが、Bカップのブラにたどり着いた瞬間に

「……チツ」

と黒い表情で舌打ちをした智狐の頭を fox が「なんか文句有んの？」

と叫びつつスパン！と引っ叩いてからの腐れ縁である。

お互いが地方の稻荷神社を実家としていて

名前に「狐」が入つてゐる事もあり、

また恋愛以外の事では凄く気が合つてしまい、

智狐の奇行に何度もうんざりしながらも付き合い続けているのだ。

「それでも、確かに智狐ちゃんは可愛いわよね。

男の口にモテるのも良く解るわ」

fox は、のほほんとした声を掛けてくる有香の顔を情けない思いで見詰ながら返す。

「そうなのよね。私が男だつたら、最初に声掛けられた瞬間に襲つちやつたわよ」

そう、確かに智狐の可愛らしさと色っぽさは並ではない。
顔はアイドル並み、スタイルはモデル並み、性格は……

「エロ親父並みかあ」

ボソッと呟く狐子を痛ましそうに見つつ、

「でも、そう言つ狐子だつて相変わらずモテモテじゃない。
相変わらず、主に下級生の女の子にだけど」

170センチの長身ですらつとした細身のスタイル、
髪をショートにしている狐子は年下の女の子の憧れの的だ。
子供の頃から男の子と元気に転げまわっていたので、
今更女子らしい格好して男とお洒落なデートとかするなんて
チャンチャンチヤラおかしいと思つてしまつ。

「はああー……」

なんだか色々と大変ねえ、とか言いながら講義に耳を傾け始めた
有香の横顔を見ながら、狐子は大きくため息をついた。

第一話 欲張り娘の午後（前書き）

第一話投稿しました
感想やご意見、待つてまーす。

第一話 欲張り娘の午後

「ねーねー 狐子ちゃん、 今夜の合コンなんだけじょ」
講義が終わり、 狐子が学食でおやつ代わりのキッネうどんを啜つて
いると

智狐がやつて来て、 ウキウキした表情で話し掛けってきた。

「んー、 私はバスつて真美子に言つておいたけど?
つてあんた、 何たぬきそば持つて来てんのよ?」

「だつてえ、 学食のキッネうどん飽きてきちゃつたんだもん」

狐子が呆れたように智狐を見詰める。

「あんたねえ、 いくらなんでもたぬきは無いでしょ、 たぬきは」
「そんな事はどうでも良いんだけど、

「 今夜の合コンの相手の男の子の中に、 アレが『るりしげ』のよね
ずずずとおそばを啜りながら智狐が嬉しそうに言つ。

「アレって、 もしかしてアレ?」

「そーなのよ! 久しぶりでしょー!

「 もー、 絶対落とすんだもん! アレならエッチも強いし、

散々ヤリまくつた後に更に美味しく頂けるじゃなあい?」

「ふばつ!... ザベゴぼづは!... きいやああああつ!...

狐子たちの隣の席のカップルの男がカレーライスを爽快に噴出して、
目の前に居た彼女らしき娘がカレーまみれになつて悲鳴を上げた。

狐子はカップルを氣の毒そうに見た後、

「 何お氣楽な事言つてんのよ。 アレのチカラがどれ程のものか
解らないんでしょ? あんたはまだまだ成熟し切つてないんだから、
逆に取り込まれる可能性だつて十分有るのよ?
この前だつて、 危なく逆喰さかはみされそうになつた癖に」

と非難がましく智狐に注意する。

「えへへ～、でも止められない止まらないのよね～。
で、狐子ちゃんにお願いっ！」

今夜の合コン、バスなんて言わないで一緒に来てえ。

一番は狐子ちゃんに譲るからあ

「あんたなあ……」

狐子は溜息を付きながら額を押さえるが、一番を譲る、
という所で一瞬だけ表情が動いたのを智狐は見流さない。

「ねー、一番は狐子ちゃんに譲るからあ。一番は」

一番、を連呼する智狐と、一番、に反応してピクピクする狐子。
自分達の世界に入り込んでいる一人を周囲が冷ややかに見詰めてい
る……。

「あら、おキツネ様が一人揃つて頭抱えてどうしたの？」

その時、涼やかな声が一人に掛かり、

「あ！ 狼子先輩！！」

狐子がかあつと頬を赤くしながらがたーん！と立ち上がり、

「……ちつ」と黒い表情で吐き捨てるように智狐が呟いた。

- 久遠神狼子 -

狐子と智狐のゼミの先輩で有り、学内最高の美人として名高い才女。
決して自ら目立とうとする事は無く、控え目で清楚な性格で
教授から下級生まで幅広い人気を誇っている。

智狐の同郷の先輩でも有り、実家はオオカミ様を祀る神社で、

狼子は智狐を可愛がっている様に見えるのだが、なぜか智狐は狼子
を煙たがって避けている。

狼子が焼肉定食の載つたトレイをすいつとテーブルに置きつつ智狐
の隣に腰掛ける。

「……狼子先輩、なんで私の隣に来られるんですかあ？」

天使の様な微笑で悪魔の様に毒を吐く智狐に、狐子の心臓がドキーン！と跳ね上がる。

「ちょっと智狐！なによその言い草は！？」

まるで自分が獵犬に追い詰められたような気分になりながらアタフタとキヨドリ、狐子は智狐を叱り付けた。

「だつてえ、狼子先輩に隣に座られるなんてえ、恐れ入谷の鬼子母神だもん！」

両手を顎の下で握り締め、プルプルと頭を振りながら可愛狐^{かわいこ}ぶる智狐。

「良いのよ、智狐ちゃんは照れてるだけだものね」

狼子が音も立てずにお茶を啜りながらにつこりと微笑む。

狐子がふと見ると、既に焼肉定食は完食されていた。

”ど、どんだけ……”

一分と掛からず、運動部の連中も満足するボリュームの定食を平らげた

ほつそりとした純和風^{やまとなでしこ}美人の雅な微笑を冷や汗混じりに見詰める狐子。

「どうしたの狐子ちゃん？私の顔になにか付いてるかしら？」

薄いピンク色の唇を形良く開きながらにつこりと笑う狼子の口元から、

鋭利な犬歯がのぞいてキラリと光つた。

「あわわわわ……な、なんでもありません！」

狐子はその静かな迫力にさーっと青ざめながら、

「わ、私達ちょっと用事があるので失礼しますっ！」

と叫んでたぬきそばをズバズバと啜つている智狐を引き摺り学食から走り出る。

「あらあら、忙しいわねえ、キツネさん達は」

不思議そうに一人を見送った狼子は、食券販売機で唐揚げ定食の食券を買いながら呟いた。

「あのー、おそばの丼どうしましょーか？」

「ぜいぜい」と肩で息をしながらベンチに突つ伏す狐子に、
すずーっとたぬきうどんの汁を飲み干した智狐が声を掛ける。

「知るかっ！－後で返しに行けばいいでしょっ！－！」

「へーい」

フンフンと鼻歌交じりに辺りを見回していた智狐が

「あ、武藤くんだ。おーい」

と歩いていた男子学生に声を掛けた。

「あーあ、秋葉……」

声を掛けられた武藤はビクッと驚き、おどおどしながらひりひりしゃつて来る。

「うふふふ、ねえ武藤くん？なんで昨夜帰つちやつたの？」

にまあ、と微笑む智狐の目が赤く光り始める。

「あ、うー、『メン。昨夜はちょっと……用事、が……』

智狐がすいと武藤に近付き、背中に手を廻して抱き付きながら首筋に唇を当てた。

「あ、秋葉……」

武藤が目を瞑り、ピクピクと痙攣を始める。

「うふふふ……ちよつとだけ、いただきまஆす……」

武藤の首筋をちゅううと吸いながら、智狐の右手がはちきれんばかりに盛り上がった

武藤のGパンの中心をさわさわと小刻みに撫で始める。

「うーうああ……ああああーー！」

次の瞬間、武藤の長身がピクピクンーと大きく痙攣し、
ガクツと頸垂ながらへナへナと芝生の上に崩れ落ちた。

「あらあ、早い事早い事。ま、でもビタミン剤程度にはなったかな

Gパンを通して滲み出した、武藤の精の付いた右手をペロッと舐めながら智狐が色っぽく呟く。

「よつやるわ……」

「らた狐か子は呆れ声で呟きながら、智狐の行為を見て火照つてしまつた肉か体かを持て余していた。

第三話 危険な合戦

「かんぱーい！」

学校近くに在る、付近の学生やサラリーマン御用達の安くて美味しい居酒屋。

集まつたのはオトコ五人にオンナ七人。不参加の筈だつた狐子が智狐によつて半ば無理矢理参加させられたので、

男女比が狂つてしまつた。

「も～、だからヤダつたのに～」

巨峰サワーをぐいっと飲み干し、ケラケラと陽気に笑う智狐を睨みつつ呟く狐子。

狐子の横にはニヤケ面の軽そうな男が座り込んで、狐子を口説き始めている。

智狐は既に一人の男を侍らせて上機嫌だ。

そして、余つた二人の地味目な娘の憎しみの籠つた視線が狐子と智狐に突き刺さる。

それにもしても、智狐の言つてたアレは一体どの男だろうか？

いつもならアレがどんなに隠そつともハツキリと解る筈なのに……大きく溜息を付いて、しつこく話し掛けたるニヤケ面を適当にあしらおうかと口を開きかかつた時、

「やあ、遅れてゴメンね！」

と爽やかな声で挨拶をしながら、本田の男の中でぶつちぎりのイケメンが現れた。

「レイ遅いぞ！ペナルティだペナルティ！」

男側の幹事がイケメンに向かって口を尖らせながら文句を言つ。

「悪い悪い、ちょっと教授に呼ばれちゃつてさ」

人懐っこい笑顔を浮べながら靴を脱ぎ、座敷へと上がりつつ自己紹介をするレイ。

その瞬間、狐子と智狐の背筋にピリピリとした電流の様な感覚が走つた。

” 来たよ、狐子ちゃん！ 彼ね”

智狐がチラッと狐子を見ながら嬉しそうに精神に直接話しかけて来る。

” つて、ちょっとヤバいんじゃないの！？ かなり強そうよ”
しかし、狐子は今まで遭つたどのアレよりも強力なピリピリ感を感じて不安になつていた。

” う。確かに……でも、きっとメチャクチャ気持ち良くて美味しいわよ。二人なら大丈夫よ、きっと”

” あんたねえ、それでこの前やられ掛かったの忘れたの！？”
全然懲りてない智狐にうんざりしながら狐子はもう一度レイを見る。と、いつの間にかレイがこちらを見ていてニヤリ、と微笑んだ。

ゾクつとした強烈な寒気を感じて、狐子の本能が” ヤバい！” と警鐘を鳴らし出す。

智狐に彼は止めよう、と念を送ろうとした瞬間、

” キミ、可愛いね。智狐ちゃんつていうんだ”

レイが智狐を挟んでいた男の一人を退かし、馴れ馴れしく智狐の肩を抱きながら座つた。

” ありがとうございま～す でも、いきなりコレは無いですよ”
にっこりと微笑みながら智狐が肩に廻されたレイの手を摘みあげてどかす。

” ありや、イヤだつた？ こりや失礼！”

おどける様に笑いながらレイが智狐から手を離した、が

狐子の手には肩から離れた筈の手がそのまま残つてゐる様にしか見えない。

いや、退かした手とは別の、普通の人間には見えない手が智狐の肩に残つたままだつた。

「智狐、ちょっとトイレ付き合つてよ」

レイが残した靈手に智狐は気付いていない。

このままじゃ、あの手が智狐に何をしてくるか解らない！

狐子はちょっと無理が有るな、と思いながらも智狐と連れトイレに誘い、

「うん、良いよ」

智狐もそつ言いながら立ち上がり、狐子と一緒にトイレへと向かつた。

智狐の隣に並んで歩きながら、レイが残した筈の手を確認すると既に離れているのか全く見えないし気配も無くなつてゐる。

「ねえ、あんた気付いた？あんたの肩に彼の靈手が残つてたの」トイレの洗面台に並び、小声で智狐に聞く狐子。

「えつ！ そなんだ。道理で違和感有る筈ね」

あちゃあ、といった顔で驚く智狐に

「ねえ、彼はヤバいわ。今まで見てきた中で最高クラスの”鬼”よ」と少し震えた声で言う狐子。

”鬼”……

全ての人間が内包して生まれてくるが、それに気付き、自覚し、そしてその力を行使出来る様になる人間は少ない。

だが、もしその力を行使出来る様になつたとすると……

「遅いじゃない、二人とも」

「きやつ！」「ひやあつ！」

突然背中に掛けられた言葉に驚いて振り返る一人。

そこには、さつきの爽やかな微笑ではない邪悪な笑みを浮べたレイがすうつと立っていた。

「ここは女子トイレなんですけどお？」

智狐が後退りながら震えた声で注意する。

「うん、解ってる。大丈夫、外の人間は皆寝てるから」

「なんですかー！？」

狐子がハツとした様に時計を見る。

腕に巻いたGショックのデジタル表示が全く進まなくなっている。

「時間を止めたの…？」

智狐と狐子の顔がさーっと蒼ざめる。

蒼くなつた二人の顔を愉快そうに見ながらレイの笑いがいつそう邪悪に深くなり、

「『』のような狐を二匹、まだ未熟なうちに喰つちまえるとはなぐん、と奇妙に歪んだかと思うと皮膚がぐんぐん赤くなつていく。

「『』あああああああー！」

全身を真っ赤に染め、床を震わすような雄叫びを上げるレイの姿は既に人間のモノでは無くなつていた。

第四話 狐子・人生終了？（前書き）

穂波です！

お待たせしましたあ。

ちょっと忙しくてう「しゅ」つ「しゅ」してました(・_・)ゞ

これから頑張って書きまますのでヨロデス！

第四話 狐子・人生終了？

「ちょ！ヤバいわよ！」

狐子が焦りながら叫んで智狐を振り返ると、既に智狐の鼻が尖り始めている。

「狐子ちゃんも早くコンー！」

服から抜け出すように跳躍し、鬼の肩に喰らい付いた智狐に向かって「わ、解ったわよ！ちょっと耐えてて！」

と答えて変化し始める狐子だったが、変化しなれている智狐と違い狐子が変化しきるのには多少時間が掛かつてしまつ。

「きやん！」

鬼の腕に掴まれ、無理矢理引き剥がされた智狐が悲鳴を上げるのを見つける狐子。

「狐子ちゃん、早くうつーー！」

智狐が鬼の腕から逃れ、飛び退こうとした時に一本に分かれた尾の片方を掴まれ、振り回されて壁に叩き付けられてしまつた。

「きやうん！」

ビクン！と大きく跳ねて悶える智狐。

「まずはこっちから喰らうてやる……」

床の上で悶える智狐に手を伸ばしかけた鬼が、ピタリとその手を止めた。

「今度は私が相手だコンー！」

鬼の背中に、智狐の変化体よりも一回りは大きく尾も四つに分かれている

狐子の変化体が跳躍しながら襲い掛かる。

鬼が振り返るよりも早く、狐子は太い首筋にガツと喰らい付いた。

「ぐえああああー！」

鬼が苦痛に吼え、狐子を引き剥がそうと豪腕を背中に廻すが

foxes are crafty and will bite the hand that feeds them.

「ハーン！」

「ぐおおおおおおー！？」
その時、なんとか回復した智狐が鬼の股間にはつしと喰らこ付いた。

鬼の口から
苦痛の様な快感の様な
なんとも言えなし叫びが漏れ
る。

はむはむはむん···ん

喰らい付いた智狐の顔が、とても美味しいそうな湯け顔に変わって行くのを見て

「ちゅうと、最初は私に譲るって話でた癖に戻へ」と思わず首筋から牙を抜いて文句を言つてしまふ fox 子。

しゅるるる、と縮小するように入間の姿に戻つた鬼がビクンビクン！と振るえ、

ヘナヘナと床に崩れ落ちる。

「えへへ、コメンね狐子ちゃん。だって、ああするしかなかつたんだコソ

「む―――！ ハン！」

シユルシユルと人間の姿に戻る二人。

がつしと智狐の肩を掴み、ずすいと迫る狐子。

「ちょ！何する積りなの！」

必死で逃れようとする智狐をぐつと捕れえてぶらさうと頭を捕し付け、

「むーむー、むーーー。」
無理矢理に智狐の口の中に舌を出しじゃむ。

壁に押し付けられ、強引に唇を奪われた智狐が手足をぶんぶかと振り回しながら抵抗するが力ではとても適わず、少ししたらくたんとおとなしくなってしまった。

କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

「もう！ 殴り残つて無いじやない！」
ビクビクと震える智狐にしばらく吸い付いていた狐子だったが、
と文句を言いながらバツと唇を離す。

と女を言ひながらハシと扇を離す

ひとしょ狐子ちゃん

半泣きでへはへはと崩れ落ちながら、簪が弱々しく打譯の声を上げた。

ブウン…

「あら、時間が動き始めたわね」
一瞬耳障りな音がして、静かだった世界に音が戻つてくる。

ふう、と溜息を付きながら智狐とレイを見下ろす狐子。そして、素っ裸の智狐に気付き、自分達が変化したまま服を着忘れていた事をようやく思い出した。

「ヤ！ヤバッ！！」

また見計らつたよつなタイミングでトイレのへつ口のドアノブが力
チャ、と音を立てて回り、
「ひょええええ！」
狐子が叫びながら床に散乱した自分の服をかき集めるも
すでに間に合うワケが無く、無常にもドアは大きく開かれてしまつ
た。

”さよなら、私のキャンバスライフ……さよなら、愛しき普通の日
々よ……”

狐子が涙と鼻水を溢れさせながら頭を抱え蹲るのを冷やかに見詰め、

「よーいだ、こちら側へ」

等と嬉しそうに咳く智狐の日付きはこれまで見た事が無い程邪悪だ
つた。

最終話 キツネツキ！

「ああああああああ！」

頭を抱え、泣き叫んでる狐子の田の前で、ドアが無常に開く。

” わよなら……私の青春……わよなら、私の恋心……”

混乱した狐子が、混乱した思考で意味不明な脳内世界を展開していると、

「あらあ？おキツネ様が揃つて変態行為してたのね？
もう、お茶田さんなんだからあ」

と聞き覚えの有る声が響く。

「え？」

涙と鼻水をダーツと流した狐子が恐る恐る頭を上げると、そこには狼子が一コ一コしながら立っていた。

「げ」

智狐が心底嫌そうに顔を歪めながら呻くのを聞いた狼子が
「なあに？二つちの狐ちゃんはここで大声出してほしいのかしら？」
と色っぽい流し田を送りながらふふん、と鼻で笑った。

「狼子先輩……？」

狐子は入ってきたのが狼子だったことに心から安堵しながら、
しかしキャンパスで見る狼子とは明らかに異なるその雰囲気に一瞬
ぞくつとする。

「ね～智狐ちやあん？あなた私を舐めてるんでしょ？」

ひくりと引き攣っている智狐のあごをひょいと摘要、狼子が色っぽ

く囁く。

「あれ？あはは、狼子先輩、もしかして酔っ払つていらつしゃいません？」

あつといつ間に真つ青になつた智狐が恐る恐る、とこつた感じで尋ねると、

「そつよ～？飲んでちやいけないのかしら～？」

とこつこつと微笑みながら、狼子が智子のまつペをみよーんと左右に引つ張り始めた。

「いひやいいひやい！しえんはいいひやいっしゅ！」

半泣きになつた智子が叫びながら、狐子に助けを求める様に涙を溢れさせた瞳を向けるが、

狐子も青白いオーラすら醸し出してくる狼子の様子にビビリてしまい声も出せない。

「ふふふ～ん、悪い子にはお仕置きしなきやね～
さあ、こりりしゃい！ガンガン飲むわよ～？」

狼子はささつと素早く散乱していた服を智狐に着せ、耳を引つ張つて連行していく。

「ほら、狐子ちゃんもこりりしゃあい～私のお酒が飲めないなんて言わないわよねえ？」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ、と言つ擬音すら聞こえて来そつな様子で振り向く狼子に、

「ひや、ひやい！頂きます！」

と答えながら大急ぎで服を着て、智狐を引き摺る狼子の後に続く。

「よ～し、お姉さん今日は奢つちやうつ～」

調子良く気勢を上げながら歩く狼子について行きながら、狐子が何か忘れていた様な気がしてふと考え込んだ瞬間、

「あ。彼、置き去りにしちやつた」

耳を引っ張られながら連行されている智子と狐子は田を合わせながら思い出したが、

卷之三

れあれあと才駄さにならん」へり方面に向かうて手を合わせながら二人は狼子のテーブルに無理矢理座らされ、酒をガンガン飲まされ

始めた

翌朝、猛烈な頭痛と吐き気で目覚めた狐子がトイレに行こうと体を起こすと、

下着姿のままで、と隠していられる智狼が、口一言の上に、とつと落ちて、いるのを発見する。

最後にカウンターバーで時計を見た時に午前一時だった以降の記憶
が無い。

「…………どうして部屋に帰つて来たのかしら？」

床の上で唸っている駒をむきぬと踏んつけながらトトロに行き
しゃがみ込んだまましばらくゲロゲロと吐き続ける駒子。

「んなの、もう一回とけんだわ」

ようやく吐き終わり、口をしつかりやすいからトイレを出るとそこにはフローリングの上に寝股をぶちまけた智狐の悲惨な姿を発見した。

「ちょー！ ちょつと智狐うげえええええー！」

瞬時にもらいゲロモードに移行した狐子の口からも再びリバースが始まり、

普段はキチンとキレイに整頓されている fox の部屋に阿鼻叫喚の地獄絵図が出現してしまった。

一週間後

「おっはよー foxちゃん！」

すっかり元気を取り戻した智狐が朝っぱらから高テンションで智狐に声を掛けて来る。

「……うはよー」

対照的に、fox は思いつ切りローテンションで挨拶を返す。

三歩歩けば全てを忘れる能天気な智狐と違い、 fox は体力的にもだが、何よりも精神的なダメージが深く完全回復には至っていない。

「何よ、まだ引き摺ってるの？ そういう時は合コンよ合コン！

今夜、カッコ良い男の子がいっぱい来るコンパが有るんだけど、 foxちゃんも来るよね？」

顔に傍線を数本引いたまま智狐の声を聞き流していた fox が、

「冗談じゃないよ！ 先週の惨劇を忘れたの？ もうじばらく合コンなんてごめんだわ！」

と、凄まじい勢いで智狐に喰つて掛かった。

「え？ だつてあれは、クソ狼が乱入して來たからあんな悲惨な事になつたんで、

別に私も合コンも悪くなんてないじゃない？」

小さな拳をあいの下に付け、ふるふると顔を振りながら可愛狐^{かわいい}ぶる智狐を見て、

ビクつと青筋を立てながら fox が叫ぶ。

「アホかあつ！ とにかく行かないんだから！」

ぷいっとそっぽを向いてスタスターと歩き出す fox だったが、智狐は

しつこく追い縋る。

「ねーねー、今夜はクソ狼とバッティングする様な場所じゃないから大丈夫よーね？」

「あらあ、クソ狼って誰のことかしら？」

その時、一人の後ろから穏やかな、しかし地獄の底から響いて来る様な声が掛かつた。

「あ！狼子先輩！」

狐子がぱあっと微笑みながら振り返ると、乾いた笑いを張り付かせたままの智狐の真後ろに

でっかい青筋を立てながらにこやかに微笑んでいる狼子の姿が有る。

「智狐ちゃん？ちょっとこっちいらっしゃいな？」

ワシッと肩を掴まれた智狐が、

「助けて狐子ちゃん……」

と涙をダーツと流して微笑みながら必死で助けを求めてくる。

だが、狐子はふつと冷笑しながら

「狼子先輩、さつき智狐が先輩の悪口を一ダース位言つてましたよ。

たっぷり、お仕置きして上げて下さいね」

と言い放つ。

「ふうううううん？智狐ちゃんは同郷の先輩にそういう態度なんだあ？」

今日ははじつくりとお説教しなきやね～？

「コレは智狐ちゃんの為なんだから、感謝してね」

ギリギリと肩に食い込む狼子の手の痛みに、智狐は声すら上げられない様だ。

「じゃあ、狼子先輩お願ひしますね～！」

智狐ちゃん、しつかりご指導してもらつて来てね！」

ふつと侮蔑の笑いを投げ捨て、歩き出す狐子の背中に、

「裏切りモノおおおおーー！」

ところの智狐の魂の叫びがこだました。

「やれやれ、まだまだこの先波乱含みなキャンパスマイルになりそ
う……」

溜息交じりに呟く狐子だったが、その口調は以外に楽しそうな色も
含んでいる。

「や、こんじはもつとまともな男見つけなきやね！」
にっこりと微笑む狐子の唇から零れた牙が、陽光を浴びてキラリと
光った。

一人のキツネの廻りには、まだまだ騒動が続きそうだ。

キツネツキ！ 終

最終話 キツネツキー（後書き）

こんには、石神です。

読んで下さった皆様、ありがとうございました！

小説を書くのがこんなに難しいなんて思いませんでした……。

正直、身の程知らずに浮かれていた自分を反省します。

でも、懲りたりなんかせずに、頑張って勉強して今度はもうとまともな作品を皆様にお届けしたいと思います！

その時には、また読んで頂ければとっても嬉しいです！

本当にありがとうございました。

最後に、この企画を頑張つて企画、運営して下さった春工口様と、完結させる気力を無くしていた私を叱り飛ばして、気持ちを奮い立たせてくれた大好きな私のおじ様、羽沢将吾センセイに心からの感謝を込めて！ありがとうございました！！

それでは、また逢う日まで、機嫌よつーー！

石神 穂波

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7840d/>

キツネツキ！

2010年10月14日00時22分発行